

21 「従来型の教育のあり方、公教育の形が問われている！」ことは間違いない?!

堂本 彰夫

(1) 「不登校」から見る、現在の教育のあり方、公教育の形への疑義?!そこにあるものは?

この度 (1/27)、NHKの総合テレビ (『NHKスペシャル』) で、「話そう!“学校”のみらい 不登校 30万人から考える」という番組があった。ここでは、その番組視聴の感想 (想い) を、私が主張してきている「教育協働」という観点から述べてみたいと思う。ただし、そういう意味では「真面目な視聴者ではない (異邦人的?な) 者の勝手な感想 (想い) とはなるので、かなりの不整合 (勇み足?) とはなるが (世間は、まだまだそこまでの視点で「学校」を見ることができていないということ、残念ながら?不遜にも思っている人間であるということである?)、分かる人には分かって欲しいということではある?!

そこでまず、その大前提となる感想 (想い) であるが、やはり現在の「学校教育」(本当は、教育全体ということであるが!) は、その「みらい」を、まさに真剣に語らなければならないほど、のっぴきならぬ状態 (臨界期?) に達しているということである!そして、その顕著な兆候 (証拠) は、何と言っても、ここで提起されている「不登校 30万人 (小中学校)」という現実であるということである!言い換えれば、それが、いわゆる「最後の砦?」としての「義務教育」の段階、しかも、それなりの善処措置 (経済的支援等) が行われている中での数字であるからであるが (もちろん経済的な理由もまだまだある!), それで、「行きたくても、行けない!」「行きたくない!」「行っても面白くない!」、さらには、「行きたくなければ、行かなくてもよい!」というような論調 (主張) の錯綜の中での議論となっているということである (存在そのものの危機?)!

ちなみに、今回の番組について、同局のネット提供情報によれば、『「学校のみらい」をとことん考える1部では、解決のヒントを求めて国内外の教育現場の最前線を取材▼いま韓国で人気が高まる「生徒主体の学校」とは?▼フランスでは悩む子どもを絶対に一人にさせない徹底した取り組みが▼日本でも“子どもが来なくなる学校”を目指す改革が山形の学校で始まっている!▼みやぞんが番組をナビゲート、“学校”の当事者である子どもたちに語りかける。親子で一緒に「学校のみらい」を考えよう。』とある。そして、『“学校”のみらい』をとことん考える大特集!』として、「2部は、1部で見えてきた日本の教育の課題について徹底的に議論する。スタジオに集うのは、文科省の初等中等教育局長、学校改革に取り組む現場の教師、学校外の学びの場で子どもを支える専門家、そして不登校を経験した若者代表。▼子どもが好きなことを学ぶ授業って、学力はつくの?▼不登校の小中学生のうち11万人が学校でも相談機関でも支援を受けられていない現状をどうする?』とある。

ということで、この情報で、大体どのような番組であったのかは分かるであろうが、結論としては、「従来型の教育のあり方、公教育の形が問われている」(教育専門家の教授の言) ということである!まだこの時点では、第2部を見ていないが (本日/29日に録画視聴した!), 韓国の「代案学校」(米国の「オルタナティブ・スクール」の訳語?) やフランスの取り組み (グループ学習)、そして、国内では、山形県 (天童市) の小学校の取り組み (総合学習的なもの) 等が紹介されていたが、そのような事例は、もう既にあちこちで取り込まれているものと同じように見え、私自身は、あまり驚きはしなかったが、それらは、この文脈で言えば、まさしく「多様性」(そして、子ども達の主体性) を重視しているものであるということではある!

ただし、私自身が、改めて一番注目したのは、現場の教師の声である!すなわち、意義ややり甲斐は感じるが、「今の状態では大変難しい?しかも、『学力向上』にはなかなかつなげていけない?それが払拭されない限り、そうした動きでの対応は、なかなか前進していかない」というようなことであつた?!とは言え、「6年間の取り組みの結果、『不登校』がゼロとなった」ということが最後に示されたが、このことは、実は大きな成果ではないのか?何故、マスコミ (NHK) は、このことを大々的に伝えないのか?とも思った!

(2) 「従来型の教育、公教育のあり方」の、「どこが、どのように」問題となっているのか?

ところで、私は、以前 (『新・教育協働への道 12』)、次のような論考を為していた。それは、例の「教員の働き方の問題」に関わって、文科省 (中央教育審議会) が、「緊急答申」(「質の高い教師の確保特別部会: 教師を取り巻く環境整備について緊急的に取り組むべき施策 (提言) ~教師の専門性の向上と持続可能な教育環境の構築を目指して~)) を出した際のものである。※一部、文章を省略

…相変わらず、従前の「学校 (教育)」の枠組み・受け止め方を前提…他 (外部) からの協力要請、それらとの連携・協力の必要性が叫ばれてはいるが、そこにおける取り組みや、その方向性が、新たな地平 (パラダイム?) を求め切れていない…そこには、「教員の働き方改革」という、新しい課題、新しい看板 (キャッチコピー) が提示されてはいるが、…「教員の働き方の問題」は、以前から指摘されてきたことであるし、何も忽然と現れた問題ではない… (教員不足や

指導時間の問題として騒がれ出したとは言えるが、それらは、まさに「学校の限界／制度疲労」の問題として危惧されていた?)！…かの「生涯学習体系への移行」とか、「生涯学習社会の実現」とかは、実は、そういうことを超克するための施策スローガンでもあった…(「社会教育」の世界だけの話ではなかった…)?!…いかなる「教育問題」においても、最早(と言うよりは、「原点に戻って」と言う方が的を射ている?)、そこに見出されていくべき最重要課題は、学校内外における「連携・協力」の必要性和、それを促進・実体化させるための全体的なしくみ、すなわち「(教育)協働のしくみづくり」への力強いヴィジョン提起である…何故なら、そうした受け止め方、課題意識の方向性がなければ、これからの、「(学校)教育」におけるいかなる問題・課題も、その抜本的な解決には至らない…その時々々の個別課題・取り組みの羅列だけではダメだということである?!

要は、ここで、改めて確認(追加確認?)したいことは、教育・学習の最終理念?である「生涯教育(学習)」の理念は、いわゆる「タテとヨコの統合」を必要とするものであったが、そこに、もう一つ「統一性と多様性の効果的な結合(融合)」を求めるものでもあったということ!しかも、それは、各関係機関・部署の、絶え間ない「協働」によってしか実現出来ないということである(だから、例の「学社連携」とか「学社融合」とか叫ばれたのであるが、その「ヨコの統合」には、そうした要素が十分に浸透していなかった?)!

(3)「多様性」が必要である(求めざるを得ない?)ということに、改めて、どのような対応が必要なのか?

しかるに、そこでは、「統一性と多様性の効果的な結合(融合)」、その必要性への言及・アプローチが弱かったということでもあるが、一方では、当時は(今も?)、従来の教育(「統一性」の方が優先される?)に、批判的・懐疑的な人が多かったということもある?!思潮的にはよく分かるが(教育よりも学習の方がよいというような!)、学校教育を含んだ教育全体のあり方が議論されたわけでもあるので(実は、最初はそのように受け止められていた!)、そこには、そのような視点・要素の主張が絶対に必要であったということでもある?!

ということで、最近ではさらに強固に「多様性の実現」が各方面で主張されるが(一つの原理、一つの見方だけではうまくいかない!物事が硬直する?)、しかし、冷静に見れば、多様性の過度な主張は全体のバランスを崩すし、ある意味では特別なしくみ、対応を必要とする(今回の「不登校」問題も、結局は、そこに行ってしまった?!第2部)?!だから、そもそも一つの組織(系)だけでは、そのメリットを発揮することは難しいし、なかなかそのジレンマから抜け出すことが出来ない(「そこまではやれない!スタッフ数が足りない!」という具合!しかも、それでは財政的負担は増大する?!「制度疲労」を超えて、最早「限界?」!)?!つまり、二つの原理を、同時に、十全に発揮することは、そもそも困難(無理?)なのでもある(教員が苦勞するのは当たり前?)!

では、改めて、どうするか?それは、ある意味では簡単である!何度も述べているように、現在の教育制度全体に、「統一性」(端的には「一斉学習」)のメリットと「多様性」(端的には「個別学習」)のメリットを最大限に生かす場面(場所/関係)が、有機的に結びつくようなしくみ・カリキュラムづくりが必要だということである!現在でも、そのように動いてきているのではないかという人もいるかもしれないが、繰り返し言うが、それを、一つの組織(系)/枠組み(器)で行うことは無理なのであり、結局は、その、双方の原理が有しているメリットを壊す(壊さざるを得ない?)ことになるのである!だから、「学校教育(的なもの)」と「社会教育(的なもの)」の融合、すなわち、その意味での「学社融合」が必要となってくるのである!

しかし、それは、あくまでも現時点では、「よく分からない?『融合』したら、何が何だか分からなくなる?」そういうことにもなる?!だから、私は、それを、敢えて「教育協働」と置き換えてきたのであるが、そこには、「協働」の主体、相手が互いに見え、したがって、その「協働」の姿形、メリットが、それぞれ感得し合えることが重要だということでもある!いつまでも(相変わらずの?)『『系統学習(学力重視)』』か『『経験学習(体験重視)』』かの鼯ごっこ?」では罅が明かないのである(挙句の果ては、現場教師がそれに振舞わされ、壊されていくのである?もちろん、原因はそれだけではないが!⇔学校教育への過度な、しかも一方的な期待・要求?がそこに集中している!注目されている取り組みには、明白に、そこからの脱却が企図されている?!))!そこに、これからの「教育のみらい」『『公教育』』のあり方を見通していく鍵穴があるのである?!

なお、最後に、今後の「公教育」であるが、基本的には、「子ども達の、学校での教育・学習(とりわけ「義務教育」)」を核としていることに変わりはないが、そこには「子ども達の、学校以外での教育・学習」も明確に位置づけられており(そこでは「統一性」と「多様性」の双方が、同時に、十全に実現、保障されるしくみがあるということ!)、しかも、それを支える「大人達の教育・学習」が、それと並行して(あるいはそれを包み込むような形で)行われている!ただし、「子ども達の、学校以外での教育・学習」「大人達の教育/学習」には、原則的には「統一性」への配慮は必要ではなく、あくまでも「自己の責任と自由の名の下に」行われればよい(だから、そこにおいては、「教育」よりは「学習(支援)」とした方がよい!とは言え、それらは、別のアプローチ、例えば「福祉」的配慮が求められるということも言うまでもない!)?!いずれにしても、それら総体(総和)が「公教育」を成すのであり、そこに「教育のみらい」があるということである?! (つづく)